

入選 高学年の部

長生きしてね…ひいばあちゃん

栃木県

宇都宮市立泉が丘小学校 六年

千葉 汐音

「そおんなに力は入れなくなつたつてもいいんだよお」。五月になると、ぼくたち家族は毎年、ひいばあちゃんの家の裏の竹林でたけのこ掘りをする。ぼくが小学校一年生に入学した年の春、ひいばあちゃんが、ぼくにたけのこ掘りを伝授してくれた。ぼくのひいばあちゃんは、もうすぐ九十才。五年前まではたけのこを掘るのが、ぼくよりもずっと早くて上手だつたけれど、今は腰が痛くて掘ることができない。だから、家族・親せきが入れ替わりで、毎日竹林に顔を出すたくさんの春の恵みを掘り出す。「おお！頼もしいなあ」などとおくをおだてながら、道具の使い方や力の入れ方をていねいに教えてくれた。

ひいばあちゃんは広い畑でいろいろな野菜を育てている。冬には、「ほうれんそう、持つていくかい？」…ぼくが「うん」と返事をする前にかまや二輪車を準備し始めるので、ぼくは慌ててひいばあちゃんのとについて畑に向うのだった。収穫をしながら、戦争中のことやぼくの前祖の話を始めると話が止まらなくて、気がつくくと大根やにんじんやほうれんそうが一輪車からくずれ落ちそうなくらいの山になり、夕方の陽に照らされ長い影ができていた。ひいばあちゃんのしわくちゃな顔や手には、たくさんの苦労や思い出がつまっているんだなあと思った。そして、痛む腰や足をかばいながら一生懸命に育てた、いびつな野菜たちが愛おしくさえ見えた。

ぼくが遊びに行くと「汐音くんは、ひいばあのお自慢のひ孫だよ」と、何度も言うので、ぼくはちよつと照れくさくなつて、いつも「もういいよ」と走つて逃げてしまう。そして、裏山に行つて虫取りや石探し、前の田んぼで生き物採集をするうちにあつという間に帰る時間がきてしまうのだ。でも、今度ひいばあちゃんの家に行つたら、「ひいばあもぼくの自慢のおばあちゃんだよ」と伝えたい。だつて、たけのこ掘りや漬物作りの名人だし、おいしい味の野菜を作れるし、ぼくの家の方では見たこともない位の大きな花を咲かせるし、九十才になる今でも習字や絵画や文章を書く勉強をしている努力家だからだ。また、学校や塾では教えてもらえないようなことをたくさん教わつた。いろいろな楽しい経験を見せてもらった。昔の古い家のことや、夏の夜には数えきれないくらい蛍がいたこと、祖母の小さいころの話などを聞かせてもらった。それはぼくとひいばあちゃんのかげがえのない大切な宝物のような時間だ。そしてその想い出はぼくがこれから成長するための栄養となり、心の枝葉として、生きていくための力となつていくことだろう。

「ひいばあ、ありがとう」。

教えてもらいたいことは、まだまだたくさんあるよ。だからずつと長生きしてね。また遊びに行くから、待つてね。ひいばあちゃん。